

## 二つの「帝京篇」 : 唐太宗と駱賓王

種村, 由季子  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19664>

---

出版情報 : 中国文学論集. 39, pp.44-57, 2010-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 二つの「帝京篇」——唐太宗と駱賓王——

種 村 由 季 子

### 一 二つの「帝京篇」

唐の高宗の上元年間（六七四〜六七六）、駱賓王によって創作された「帝京篇」<sup>〔1〕</sup>は、全九十八句、総字数六百十四字に及ぶ壮大な長篇詩である。<sup>〔2〕</sup>その内容は、帝都長安の繁栄を描きつつ、栄枯盛衰の必然を説いて、やがて訪れるであろう栄華の終焉を警告し、最後にその繁栄から隔絶された寒土の存在を訴えて結ばれる。多様なテーマから構成されるこの長大な作品は、世に出るや、「当時以て絶唱と為す（當時以爲絶唱）」（『旧唐書』卷百九十駱賓王伝）と、たちまち人々の称賛を得たという。

ところで、この駱賓王の「帝京篇」と度々比較される作品に、盧照鄰の「長安古意」や、王勃の「春思賦」及び「臨高台」などがある。いずれも、駱賓王と同じく初唐四傑による作品であり、また、都の繁華なさまや、自らの不遇を詠う点など、多くの共通点を有する。それ故、従来、これらの作品群は、主にその類似性を指摘することに主眼が置かれ、個々の作品の特性については、ほとんど言及されることがなかった。<sup>〔3〕</sup>だが、先にも述べたごとく、駱賓王の「帝京篇」は、創作当時において世に高く評価されたという点において、盧照鄰や王勃のそれとは明らかに一線を画する。駱賓王の「帝京篇」とは、如何にして創作され、世の絶唱となり得たのだろうか。

実は、駱賓王の「帝京篇」には、上記に挙げた初唐四傑による作品群とは別に、特筆すべき先行作品が存在する。すなわち、唐太宗の「帝京篇十首」である。この二つの「帝京篇」の存在については、既に先行研究による指摘が

あるもの<sup>①</sup>、両者の具体的な関連性については、未だ詳しい考証がなされていないのが現状である。そこで本稿では、まず、太宗の「帝京篇十首」の創作意図を明らかにし、これを手懸かりとして、駱賓王の「帝京篇」の成立事情について、新たな解釈を試みたい。

## 二 唐太宗「帝京篇十首」の創作意図

唐の太宗李世民（在位六二六―六四九）は、草創期の帝室の安定に尽力し、貞観の治を築いた皇帝として名高い。太宗の政治に関する言行については、『貞観政要』などによって今日にも伝わるほか、残存する太宗の詩文等によっても窺い知ることができる。中でも「帝京篇十首并序」は、太宗が自らの政治理念を掲げた作品として知られる。まずは作品の内容を確認したい。

### 其一

秦川雄帝宅 函谷壯皇居  
綺殿千尋起 離宮百雉餘  
連薨遙接漢 飛觀迴凌虛  
雲日隱層闕 風煙出綺疏

秦川雄たる帝宅、函谷壯たる皇居。  
綺殿千尋起ち、離宮百雉余す。  
連薨遙かに漢に接し、飛觀廻かに虚を凌ぐ。  
雲日層闕を隠し、風煙綺疏を出だす。

### 其二

巖廊罷機務 崇文聊駐輦  
玉匣啓龍圖 金繩披鳳篆  
韋編斷仍續 縹帙舒還卷  
對此乃淹留 歆案觀墳典

巖廊 機務を罷め、崇文 聊か輦を駐む。  
玉匣 龍図を啓き、金繩 鳳篆を披く。  
韋編 断ちては仍ば続き、縹帙 舒けて還た巻く。  
此に對ひて乃ち淹留し、案に歆りて墳典を觀る。

其九

建章歡賞夕 二八盡妖妍 建章 歡賞の夕べ、二八 尽く妖妍なり。  
 羅綺昭陽殿 芬芳玳瑁筵 羅綺あり 昭陽の殿、芬芳あり 玳瑁の筵。  
 珮移星正動 扇掩月初圓 珮移れて 星 正に動き、扇掩へば 月初めて円かなり。  
 無勞上玄圃 即此對神仙 勞無くして 玄圃に上り、此に即きて神仙に對ふがごとし。

第一首では、宮殿の豪華絢爛なさまを、また第二首では、太宗が政務の合間を縫って読書に没頭するさまを、そして第九首では、盛大に催される酒宴の様子が描かれる。このように、第一首から第九首では、壮麗な宮殿と、そこに展開される天子の生活の素晴らしさが、堂々たる筆致によって綴られており、唐王朝のめざましい発展と安定を実現した太宗の自信と自負を披瀝する。さらに第十首では、第九首までの享樂的な態度から一転、自身に対する訓戒を以て総括とする。

其十

以茲游觀極 悠然獨長想 茲を以て游觀 極まり、悠然として 独り長想す。  
 披卷覽前蹤 撫躬尋既往 卷を披きて前蹤を覽、躬を撫でて既往を尋ぬ。  
 望古茅茨約 瞻今蘭殿廣 古の茅茨の約やかなるを望み、今の蘭殿の広きを瞻む。  
 人道慮高危 虛心誠盈蕩 人道 高危を慮り、虚心 盈蕩を誠む。  
 奉天竭誠敬 臨民思惠養 天を奉じて誠敬を竭くし、民に臨みて惠養を思ふ。  
 納善察忠諫 明科慎刑賞 善を納れ 忠諫を察し、科を明らかにして刑賞を慎む。  
 六五誠難繼 四三非易仰 六五 誠に継ぎ難く、四三 仰ぎ易きに非ず。  
 廣待淳化敷 方嗣云亭響 広く淳化の敷かるるを待ち、方く云亭の響きを嗣がん。

第十首において、太宗は、第九首までの自身の生活を省み、「六五」、「四三」といった古代聖王の「茅茨約やか」で質実剛健な生活を理想として、政治を行おうとする姿勢を示している。無論、この作品自体は唐王朝の繁栄を讃えるものであって、悔恨や反省は作品の主旨ではあるまい。また、この「帝京篇十首」は、創作後、石碑として立石されており、太宗の功績を天下に宣揚する役割を果たしていたと考えられる。太宗が、このような作品を創作した背景には、一体如何なる意図があつたのであろうか。「帝京篇十首」の序文において、太宗は創作の経緯について次のように述べる。

余以萬幾之暇、游息藝文。觀列代之皇王、考當時之行事、軒昊・舜・禹之上、信無間然矣。至于秦皇・周穆、漢武・魏明、峻宇雕牆、窮侈極麗。……庶以堯舜之風、蕩秦漢之弊、用咸英之曲、變爛漫之音。……釋實求華、以人從欲、亂於大道、君子恥之。故述「帝京篇」、以明雅志云爾。

余 万幾の暇を以て、藝文に游息す。列代の皇王を觀、當時の行事を考ふるに、軒昊・舜・禹の上、信に間然する無し。秦皇・周穆、漢武・魏明に至りては、峻宇雕牆にして、窮侈極麗なり。……庶はくは堯舜の風を以て、秦漢の弊を蕩ひ、咸英の曲を用ゐ、爛漫の音を変へんことを。……実を釈てて華を求め、人を以て欲に從はしめば、大道を亂し、君子之を恥づ。故に「帝京篇」を述べ、以て雅志を明らかにせん、云爾。

(傍点は筆者による。)

ここで太宗は、堯・舜ら古の哲王の遺風を慕い、奢侈に惑溺した秦の始皇帝や漢の武帝らの悪弊を一掃せんことを宣言する。さらに、教化効用としての役割を担う音楽についても言及し、古代の正統な音楽とされる「咸英の曲」を奨励する一方、軽佻浮薄で「爛漫」な音楽の改廃を決意する。このような奢侈や浮華に対する太宗の警戒心は、言うまでもなく、隋の煬帝が奢侈を極めて国を傾けたという歴史的教訓を踏まえたものであろう。すなわち、君主が「実を釈てて華を求め」れば、自ずと世の中の風紀が乱れ、ひいては国家の存亡に関わる深刻な問題へと発展し得る。太宗は、こうした事態を回避するため、天子の意志を示さんとして、「帝京篇」を創作したのである。ここで

言う「実」とは、堯や舜らの質朴誠実な政治を、「華」とは、秦の始皇帝や漢の武帝らの贅沢華奢な宮廷生活を指している。天子が質実さを忘れ、奢侈に流れた時、それは亡国の始まりとなることを、太宗は前王朝の教訓として十分に学んでいたのである。そしてこのような危惧こそが、太宗に「帝京篇」を創作せしめる大きな原動力となつたのであつた。

だが、太宗は、「実」を重視してはいても、決して「華」を否定しているわけではない。そもそも、このような「華」と「実」に関する問題は、中国における長い歴史の中で、常に繰り返されてきた議論なのである。

子曰、質勝文則野、文勝質則史。文質彬彬、然後君子。

子曰はく、質文に勝れば則ち野、文質に勝れば則ち史。文質彬彬として、然る後に君子なり。

(『論語』雍也篇)

このように、古くは『論語』にも記される通り、「文」(外見の見栄え)と「質」(内面の質実さ)の兼備は、君子の条件として考えられていた。「帝京篇」の序文において、太宗が、「実を積つて華を求め」ることを戒めたのも、かかる認識を踏まえたものであろう。

さて、太宗の「帝京篇」は、皇帝自らが、いたずらに華美へ靡くことを戒めた作品であるが、質実さを旨とすることは、臣下である官吏にも求められた。

張昌齡、冀州南宮人。與兄昌宗皆以文自名。……更擧進士、與王公治齊名、皆爲考功員外郎王師旦所絀。太宗問其故、答曰、昌齡等華而少實、其文浮靡、非令器也。取之則後生勸慕、亂陛下風雅。帝然之。

張昌齡、冀州南宮人なり。兄昌宗と与に皆文を以て自ら名あり。……進士に更擧し、王公治と名を齊しくするも、皆考功員外郎王師旦の細しりぞくる所と爲る。太宗其の故を問ふに、答へて曰はく、昌齡等は華にして、実少なく、其の文は浮靡にして、令器に非ざるなり。之を取れば則ち後生勸慕し、陛下の風雅を乱さんと。

帝之を然りとす。

〔新唐書〕卷二百一 張昌齡伝

これは、王師旦が張昌齡らの任官を不可としたことに対し、太宗がその真意を問うた場面である。王師旦は、張昌齡らについて、「華にして実少なし」と、その軽佻浮薄な文章を批判し、官吏としての器に値しないと述べて、太宗の賛同を得ている。ここから、太宗もまた官吏の資質として「実」の必要性を十分に理解していたと言える。このように、太宗の政治にとって、「華」に行き過ぎることなく「実」に気を配ることは重要な課題であった。

貞觀十四年、特進魏徵上疏曰、……國家思欲進忠良退不肖、十有餘載矣。……若賞不遺疎遠、罰不阿親貴、以公平爲規矩、以仁義爲準繩、考事以正其名、循名以求其實、則邪正莫隱、善惡自分。然後取其實、不尚其華、處其厚、不居其薄、則不言而化、期月而可知矣。……書奏甚嘉納之。

貞觀十四年、特進魏徵上疏して曰はく、……國家忠良を進め不肖を退けんと欲するを思ふこと、十有餘載なり。若し賞するに疎遠を遺れず、罰するに親貴に阿らず、公平を以て規矩と爲し、仁義を以て準繩と爲し、事を考へて以て其の名を正し、名に循ひて以て其の実を求むれば、則ち邪正隠るる莫く、善惡自づから分かれん。然る後其の実を取りて、其の華を尚はず、其の厚きに処りて、其の薄きに居らずんば、則ち言はずして化せんこと、期月にして知るべきなり。……書奏し、甚だ之を嘉納す。

〔貞觀政要〕卷三 論採官

魏徵によるこの上書は、官吏の登用について、身内や貴族を優先せず、本人の実力を見て採用すべきであること訴えたものであり、これに対して、太宗も全面的に支持している。

ところで、駱賓王が「帝京篇」という太宗と同じ詩題を用いたのは、果たして偶然であろうか。駱賓王の「帝京篇」は、太宗の後嗣である高宗（在位六二八―六八三年）の治世において発表された作品であり、当時の人々にとって、

「帝京篇」は前代皇帝の御製作品として記憶に新しい詩題であったことだろう。まして、太宗の「帝京篇十首」は、石碑としても知られる作品なのである。その太宗の「帝京篇十首」と同じ詩題を用いることに、駱賓王が、何ら意識をしなかったとは思われない。当然、駱賓王の「帝京篇」創作には、太宗の「帝京篇十首」の存在が念頭にあったと考えて然るべきであろう。駱賓王が、大胆にも敢えて太宗の御製作品と同じ詩題を用いて作品を創作した背景には、一体如何なる意図があったのであろうか。

### 三 駱賓王「帝京篇」と裴行儉

駱賓王の「帝京篇」が、創作当初から人々の支持を得ていたことは既に述べたが、吏部侍郎の裴行儉もまた、当時、この作品に高い関心を寄せた人物の一人であった。駱賓王は、「上吏部侍郎帝京篇啓」において、「帝京篇」を献上した経緯を次のように述べる。

寶王啓。昨引注日、垂索鄙文、拜手驚魂、承恩累息。……寶王散樗易朽、蟠木難容。雖少好讀書、無謝高鳳。而老不曉事、有類揚雄。徒以易象六爻、幽贊通乎政本、詩人五際、比興存乎國風。故體物成章、必寓情於小雅、登高能賦、豈圖容於大夫。

寶王啓す。昨引注の日、鄙文を垂索せられ、拜手驚魂、承恩累息す。……寶王散樗朽ち易く、蟠木容れ難し。少くして書を読むを好むと雖も、高鳳に謝する無し。老いて事を曉らざること、揚雄に類する有り。徒だ以ふに易象の六爻は、幽贊政本に通じ、詩人の五際は、比興國風に存す。故に物を体し章を成すに、必ずや小雅に情を寓せ、高きに登りて能く賦すも、豈に容を大夫に図らんや。

ここから、駱賓王の「帝京篇」が、吏部侍郎である裴行儉の要請を受けて献上された作品であることがわかる。尚書省に属する吏部侍郎は、官位六品以下の下級官僚を対象として人事を行う役職である。駱賓王の官位は、当時



最下級の奉礼郎（正十品）であった。従って、この裴行儉の要請の背景には、来る授官選考を目前に控えた事前調査の狙いがあったと思われる。いずれにせよ、榮進を図ろうとする駱賓王にとつては千載一遇の機会である。だが実は、駱賓王が裴行儉による銓選を受けたのは、この時だけではない。

（裴行儉）在選曹、見駱賓王・盧照隣・王勃・楊炯、評曰、炯雖有才名、不過令長。其餘華而不實、鮮克令終。  
（裴行儉）選曹に在りしとき、駱賓王・盧照隣・王勃・楊炯を見、評して曰はく、炯才名有り而雖も、令長たるに過ぎず。其の余華にして実あらず、克令終すること鮮からんと。

（張説「贈太尉裴公神道碑」「張説之文集」卷十四）

これは、駱賓王ら初唐の四傑が、裴行儉による銓選を受け、揃って厳しい評価を下された際の出来事である。『旧唐書』の裴行儉伝によれば、裴行儉と四傑の会見は、もう一人の吏部侍郎である李敬玄の推薦によつて実現したとされる。李敬玄は、總章二年（六六九）から、上元二年（六七五）まで、裴行儉と共に官吏の登用に携わった人物であり、この銓選が行われた時期は、この六年の間と推測されよう。

さて、ここで注意したいのは、裴行儉が、四傑の文章を「華にして実あらず」として非難していることである。裴行儉は、駱賓王の「帝京篇」を評価し、作品の上呈を求めたが、一方でこの時の銓選では、駱賓王ら四傑の文章を批判している。かかる評価の違いは、何故起きたのか。このことについて考察するため、まず、「華にして実あらず」という裴行儉の発言をもとに、裴行儉が、官吏となる人材に対して、どのような資質を求めていたのかについて考えてみたい。

裴行儉の出自である河東聞喜（現在の山西省聞喜県）の裴氏は、代々儒者或いは史官として朝廷に出仕した一族であり、『三國志』の注釈者である裴松之を輩出した名門貴族である。また、裴行儉の曾祖父である南朝梁の裴子野は、唯美主義に傾く貴族社会にあつて、独り「雕虫論」を唱えた文人として知られる。

宋明帝博好文章、才思朗捷。……於是天下向風、人自藻飾、雕蟲之藝、盛於時矣。梁鴻臚卿裴子野論曰、古者四始六藝、總而爲『詩』。既形四方之風、且彰君子之志、勸美懲惡、王化本焉。後之作者、思存枝葉、繁華蘊藻、用以自通。

宋の明帝博く文章を好み、才思朗捷なり。……是に於いて天下 風に向かひ、人自ら藻飾し、雕蟲の藝、時に盛んなり。梁の鴻臚卿裴子野論じて曰はく、古は四始六藝、総じて『詩』と爲る。既に四方の風を形はし、且つ君子の志を彰かにし、美を勧め悪を懲らし、王化 焉に本づく。後の作者は、思ひ 枝葉に存し、繁華蘊藻、用ゐて以て自ら通ず、と。

(裴子野「雕蟲論并序」『文苑英華』卷七四二)

このように裴子野は、華美な文章を「雕蟲」であると批判し、本来、詩には「美を勧め悪を懲らし、民を徳化する」「王化」の効用など、『詩経』の諷諭精神に基づく創作態度が必要であることを主張した。つまり詩は、形式美ではなく、内容面が重要であることを説くのである。裴行儉が四傑に対し「華にして実ならず」と一蹴した発言は、この裴子野の意志を継承したものとと言える。また、上元元年(六七四)、劉嶠によって、官吏登用の現状に関する以下の文章が上奏されている。

國家以禮部爲考秀之門、考文章於甲乙。故天下響應、驅馳於才藝、不務於德行。……況古之作文、必諧風雅、今之末學、不近典謨、勞心於卉木之間、極筆於煙雲之際、以此成俗、斯大謬也。昔之采詩以觀風俗。

國家は礼部を以て考秀の門と爲し、文章を甲乙に考す。故に天下は響應して、才藝に駆馳し、德行に務めず。……況んや古の作文は、必ず風雅に諧ふも、今の末学は、典謨に近からずして、心を卉木の間に勞し、筆を煙雲の際に極め、此を以て俗を成すや、斯れ大いに謬れるなり。昔の采詩は以て風俗を觀る。

(『通典』卷十七 選舉五)

ここで劉曉は、「才藝」を重視し、「德行」が励行されない官吏登用の実態を非難している。そして、詩文は「風雅」、すなわち、風俗教化の役割を担うべきであると主張する。このように、裴子野も劉曉も、人々が詩における外面の美しさばかりを追い求め、内容や諷諭精神を軽視することを憂えているのである。つまり、詩によって何を訴えるのかということこそ、詩に必要な「実」と言えるのではないだろうか。

#### 四 駱賓王「帝京篇」における「華」と「実」の均衡

では、裴行儉が「華にして実あらず」と一蹴した駱賓王の作品は、どのようなものだったのであろうか。例えば次に挙げる「詠懷古意上裴侍郎」（巻四）は、咸亨元年（六七〇）、官途に窮した駱賓王が、戦功を求めて、有力者の裴行儉に吐蕃への従軍を志願する詩である。

三十二餘罷	鬢是潘安仁	三十二餘にして罷め、鬢は是れ潘安仁なり。
四十九仍入	年非朱買臣	四十九にして仍ち入る、年は朱買臣に非ず。
縱橫愁繫越	坎壈倦遊秦	縱横として、越に愁繫し、坎壈として、秦に倦遊す。
出籠窮短翮	委轍涸枯鱗	籠を出づれば、短翮に窮し、轍に委ぬれば、枯鱗を涸らす。
磨鉛不需用	彈鋏欲誰申	鉛を磨けども、需用せられず、鋏を弾じて誰にか申べんと欲す。
天子未驅策	歲月幾沈淪	天子は未だ驅策せず、歲月は幾ど沈淪せんとす。

（「詠懷古意上裴侍郎」第一句〜十二句）

ここでは、駱賓王が、自身の不遇な状況を打破せんとする思いを切々と訴えている。例えば「三十二」、「四十九」は、それぞれ潘岳と朱買臣という漢代の人物を指すが、これは駱賓王自身の年齢とも重ねられており、駱賓王のその他の作品においても、自身の不遇を訴える際に度々用いられる。このように、「詠懷古意」は、典故の巧みな文章

表現が目を引く作品である。一方、内容を見ると、出世や栄達といった駱賓王の個人的な願望が強調され、社会全体に対する問題意識、すなわち『詩経』以来の諷諭精神は見受けられない。裴行儉が、駱賓王を「華にして実あらず」と批判したのも、このような社会性に欠ける自己主張の強い作風が、官吏たる資質に欠けると判断されたためではないだろうか。

この「詠懷古意」の献上が奏功し、駱賓王は幸いに戦地へ転ずることとなったが、結局遠征軍は大敗を喫し、期待したような立身に結びつくことはなかった。「帝京篇」が世の絶唱となり、裴行儉に提出を依頼されるのは、この従軍から数年後のことである。「帝京篇」もまた、自らの不遇な状況を訴えんとする自己喧伝の性格を持つ作品ではあるが、前出の「詠懷古意」と異なり、駱賓王の創作態度には明らかな変化が認められる。

已矣哉 歸去來

馬卿辭蜀多文藻 揚雄仕漢乏良媒

三冬自矜誠足用 十年不調幾遭迴

汲黯薪逾積 孫弘閣未開

誰惜長沙傳 獨負洛陽才

已んぬるかな、帰りなんいざ。

馬卿は蜀を辞して文藻多く、揚雄は漢に仕へて良媒乏し。

三冬（ひよ）自ら矜る誠に用ふるに足るを、十年調せられず幾たびか遭迴す。

汲黯薪（いよ）よ積まれ、孫弘の閣未だ開かれず。

誰か惜しまん長沙の傳の、独り洛陽の才を負ふを。

（「帝京篇」第八十九句く九十八句）

「三冬」、「十年不調」は、それぞれ東方朔と張釈之を指しており、不遇な立場に置かれる賢才の存在を訴える。彼らはいずれも駱賓王と同じ寒士という立場であり、このような典故の用い方は、一見すると「詠懷古意」と同様、駱賓王自身の不遇を想起させる。だが一方で、「汲黯」や「孫弘」は、大臣として出世した人物であり、駱賓王とは立場を異にする。このように、「帝京篇」では、様々な立場の人物を登場させることによって、賢才が用いられないという官吏登用の現状を批判しており、かつての「詠懷古意」に見られたような自己主張は極力抑えられ、代わりに客観的な視点が新たに加えられているのである。すなわち、「帝京篇」では、典故を多用する巧みで華麗な文章表

現は残しつつ、その内容面においても、駱賓王個人に終始することなく、公としての立場から意見を述べようとする態度が明確に表れていることが確認できよう。つまり、元々「華」ばかりで「実」に欠けるところがあつた駱賓王の作品だが、「帝京篇」では、諷諭という政治教化に不可欠な要素が加わることで、「実」の要素が満たされ、「華」と「実」の均衡が実現されたと考えられるのである。

この「帝京篇」に見える駱賓王の作風の変化には、やはり、裴行儉による「華にして実あらず」という発言が大きく影響していると思われる。裴行儉に高く評価されるためには、「実」の要素が不可欠であつた。そのため駱賓王は、詩に必要とされる諷諭の要素を新たに加えることで、作風の変化を図ろうとした。そして、その努力が遂に結実した作品こそ、「帝京篇」だつたのではないだろうか。そしてそれは、他でもない、「帝京篇」という詩題に如実に表れていると考えられる。何故ならば、「帝京篇」は、太宗が「華」と「実」の両立を宣言した作品であり、この「華」と「実」こそ、裴行儉が官吏に要求する条件だつたからである。駱賓王が「帝京篇」という詩題を選んだのは、決して偶然ではない。そこには、権力者の裴行儉に認めてもらうことで、自らの官途を切り開こうとする駱賓王のしたたかな意図があつたと考えられるのである。

### 注

(1) 駱賓王の事績及び各作品の制作年代については、楊柳・駱祥発『駱賓王評伝』（北京出版社、一九八七年）に収める「駱賓王簡譜」に依拠した。また、駱賓王の詩文の引用については、清の陳熙晋箋注『駱臨海集箋注』（上海古籍出版社、一九八五年）を底本とし、適宜諸本を参照した。「帝京篇」は、卷一に所収される。

(2) ただし、全九十八句中、第七十一句〜第七十四句（春去春來苦自馳、爭名爭利徒爾爲、久留郎署終難遇、空掃相門誰見知）の四句については、『文苑英華』以外の諸本には無い。

(3) 駱賓王「帝京篇」とこれらの作品を比較した研究については、例えば、駱祥発『初唐四傑研究』（東方出版社、一九九三年）、及び高木重俊「王勃『春思賦』と盧・駱の七言長篇詩」（『初唐文学論』、研文出版、二〇〇五年）など

がある。

- (4) 例えば、前掲注(1) 楊柳・駱祥兪『駱賓王評伝』一三七頁など。
- (5) 太宗の「帝京篇十首」については『文苑英華』(巻百九十二)を、また、序文については『唐詩紀事』(巻一)を底本とした。
- (6) 「六五」は、六王(夏禹・商湯・周武王・周成王・周康王・周穆王)と五帝(黄帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜)を指す。
- (7) 「四三」は、四王(夏禹・商湯・周文王・周武王)と三王(夏禹・商湯・周文王)を指す。
- (8) 北宋の趙明誠の『金石録』巻三に、「唐帝京篇。太宗御製、褚遂良行書。貞觀十九年(六一九年)八月」とある。
- (9) 「咸英の曲」は、黄帝の作と言われる「咸池」と、帝嚳の作と言われる「五英」の二つの楽曲を指す。
- (10) 『魏書』樂志五に、「三代之衰、邪音の間に起れば、則ち爛漫靡靡の樂有りて焉に興る(三代之衰、邪音間起、則有爛漫靡靡之樂興焉)」とある。
- (11) 『貞觀政要』巻六の論儉約に、「隋の煬帝、志厭うらく無きに在り、惟だ奢侈を好む。所司供奉營造有る毎に、小ちしく意に称なはざれば、則ち峻罰嚴刑有り。上の好む所は、下必ず甚だしき有り。競ひ為すこと限り無く、遂に滅亡に至れり。此れ書籍の伝ふる所に非ず、亦た陛下の目の親しく見る所なり。(隋煬帝、志在無厭、惟好奢侈。所司每有供奉營造、小不稱意、則有峻罰嚴刑。上之所好、下必有甚。競爲無限、遂至滅亡。此非書籍所傳、亦陛下目所親見)」とある。
- (12) この吏部侍郎については、裴行儉と断定するに明確な証拠を欠くが、駱賓王には他に「詠懷古意上裴侍郎」や「上吏部裴侍郎書」などの書翰文があり、加えて、駱賓王が「帝京篇」を創作したとされる上元年間は、裴行儉が吏部侍郎の任にあつた時期と重なつており、この吏部侍郎を裴行儉とする点では、諸氏の見解の概ね一致するところである。
- (13) 『張説之文集』は、四部叢刊初編本を底本とした。
- (14) 『旧唐書』巻八十四の裴行儉伝における記述は次の通り。「時に後進に楊炯・王勃・盧照鄰・駱賓王有り、並びに文章を以て称せらる。吏部侍郎李敬玄盛んに延誉を爲し、引きて以て行儉に示す。(時有後進楊炯・王勃・盧照鄰・駱賓

王、並以文章見稱。吏部侍郎李敬玄盛爲延譽、引以示行儉」。なお、この銓選が行われた時期については、『太平広記』卷百八十五に、「咸亨二年（六七二）、有楊炯・王勃・盧照鄰・駱賓王、並以文章見稱。吏部侍郎李敬玄盛爲延譽、引以示裴行儉」とある。

(15) 潘岳の「秋興賦序」（『文選』卷十三）に、「晋の十有四年、余春秋三十有二にして、始めて二毛を見る。（晋十有四年、余春秋三十有二、始見二毛）」とある。駱賓王がこれを引用して自身の年齢を示したとする指摘については、高木正一「駱賓王の傳記と文學」（高木正一『六朝唐詩論考』所収、創文社、一九九九年）二七五頁に詳しい。

(16) 『漢書』卷六十五の東方朔伝に「（東方朔）上書して曰はく、……年十三にして書を学び、三冬にして文吏用ゐるに足る、と。（上書曰、……年十三學書、三冬文吏足用）」とある。

(17) 『漢書』卷五十の張積之伝に「張積之、賈を以て騎郎と爲り、文帝に事ふるも、十年調せらるるを得ず、名を知らるる亡し。（以賈爲騎郎、事文帝、十年不得調、亡所知名）」とある。